＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

京教竹友会

竹の可能性を掘り起こせ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要など

１．京都教育大学竹友会では 2018 年 5 月～2019 年 1 月まで研究活動を行った。

活動目的

・京都教育大学および近辺の竹を用いて、活用方法を探究する。

・竹を用いた活動を通して地域との関わりを深める。

・周辺地域の活性化を図る主体的かつ持続的な活動を目指す。

２．代表者および構成員

・代表者

東谷　隆誠　発達障害教育専攻　３回生

・構成員

河合　弘明	技術領域専攻	４回生
貞永　澪音	理科領域専攻	４回生
渡辺　開	社会領域専攻	４回生
正司園　美音	理科領域専攻	２回生
丸山　大輝	理科領域専攻	２回生
木原　菜穂美	技術領域専攻	２回生
小松　明日香	技術領域専攻	２回生
田中　美帆	技術領域専攻	２回生
玉置　彩香	技術領域専攻	２回生
高矢　和希	技術領域専攻	１回生
長谷川　千華	技術領域専攻	１回生

計 12 名

３．助言教員

原田　信一　技術科教育教授

浜田　麻里　本学国文学科教授

４．協力団体と協力者

・南山　泰宏　教員

大阪府立園芸高等学校環境緑化科

本学環境教育実践センター専任

・藤森盆踊りフェスティバル実行委員会

・ぴあぴあコミュニティサポート合同会社

・公益財団法人　青少年野外活動総合センター

・京都教育大学附属京都小中学校

・京都市立藤森小学校

・国際交流サークル FIRA

・近畿大学ボランティアサークル FeeLink

・京都橘大学まちづくり研究会

第２章　内容や実施経過など

１．竹灯籠手作り市

日程：5/20、

藤森神社にて毎月第三月曜日に開催される「手作り市」に、竹灯籠手作り体験という企画で参加した。主に地域の児童を対象として行った。事前に竹灯籠手作り体験を行うことを宣伝するためのチラシを作成し、藤森小学校に在籍する児童、職員合わせて 467 人に配布した。当日は１人につき 2 つの竹灯籠を作成してもらい、1 つは持参してもらった。もうひとつの竹灯籠は 8/5 に行われた藤森盆踊りフェスティバルの参道にて展示し、ライトアップさせてもらった。当日は 28 人の方に参加いただいた。参加していただいた方全員に紙媒体を用いたアンケート調査を行い、チラシの宣伝効果があったかを調査した。28 人のうち、14 人が小学校で配布されたチラシをみてきたと回答された。また、7 人がチラシを見た人から教えてもらったと回答された。全体の 75 パーセントがチラシの宣伝の影響で参加したということがわかる。下の（写真 1）は当日参加した方が作成した手作り竹灯籠である。

写真１

２．七夕イベント

期間：7 月中旬～8 月中旬

（1）七夕のシーズンに合わせて催される軽音部とフォークソングクラブのライブの七夕装飾を行った。軽音部、フォークソングクラブのライブではかぐや姫なりきりセット（写真 2）と、笹飾り（写真 3）、ライブ用に作成した竹灯籠を設置した。笹飾りに短冊をさげて七夕の願い事を書いたり、かぐや姫なりきりセットで写真撮影をしたりと七夕らしい体験ができる空間をつくることに努めた。

写真 1

写真 3

（2）前年度に引き続き、留学生の方に日本の夏の風物詩である「流しそうめん」を体験してもらうために、7 月 19 日に国際交流サークル FIRA と連携して流しそうめん大会と七夕企画を行った。（写真 4）流しそうめん大会では、そうめんだけでなくキュウリ、ミニトマトなど夏らしいものを流してたのしんでもらった。その後、短冊に願い事を書いてもらい、笹に飾った。今年も留学生の方に流しそうめんという文化に触れ､楽しんでもらうことができた。

写真 4

（3）8 月 19 日に本学学生の地元の地域子ども会にて流しそうめんを行った。流しそうめんははじめて体験するという児童が多く、体験する機会にすることができた。（写真 5）

写真 5

３．藤森盆踊りフェスティバル出展

日程：8 月 5 日

8 月 5 日、藤森神社にて藤森盆踊りフェスティバル実行委員会主催の藤森盆踊りフェスティバルが開催された。5 月ごろより毎月連合自治会の方との打ち合わせに参加し、地域の方と協力して藤森盆踊りフェスティバルの運営企画を行った。宣伝活動として、学内では軽音部とフォークソングクラブのライブに訪れた人にチラシを配布してもらった。また、学内の掲示板を活用した。学外に向けては、手作り市同様藤森小学校にてチラシの配布をお願いした。また、JR 藤森駅の掲示板にもお願いをして掲示してもらった。SNS を用いて発信をすることで宣伝活動を行いもした。今年度も、昨年度同様に参道入り口一帯に竹灯籠ライトアップ（写真６）を実施した。今年度は 5 月 20 日に行った竹灯籠手作り体験で参加者が作った竹灯籠と、かぐや姫なりきりセットも設置した。また、参道に訪れた人に声をかけ、グーグルフォームを用いたアンケートに協力していただいた。主に宣伝活動の効果を調査するために行った。100 枚のプリントに QR コードを添付して配布した

結果、53 名もの回答をいただいた。「盆踊りフェスティバルに竹灯籠の展示があることを知っていた」という項目に対して、「はい」という回答が 84.9%、「あなたが盆踊りフェスティバルに来ようと思ったきっかけを教えてください」という項目に対して「竹灯籠のライトアップを見るため」という回答が 37.7%であった。およそ 2000 人の方が盆踊りフェスティバルに訪れた中での標本調査という形になるが、母集団の性質を統計学的に推定する根拠として参加者の８割以上に認知されていたということが挙げられると考える。

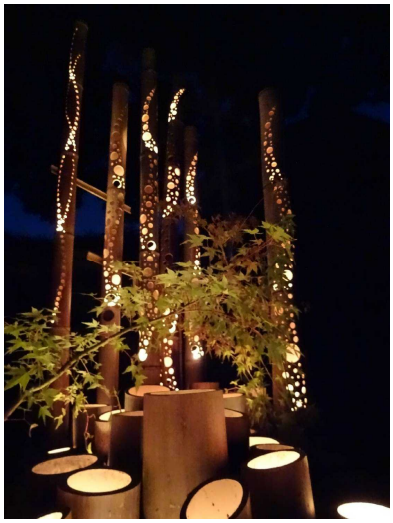

写真 6

４．近江舞子竹ブランコ

日程：10 月 14 日

滋賀県近江舞子の琵琶湖沿いに 8mに切った竹を用いて巨大ブランコを設置した。多くの児童が訪れ楽しむ姿が見られた。10 月 13 日に竹に切り出しを行い、トラックで運搬した後琵琶湖沿いに設置した。竹は近江舞子にある竹林の管理責任者の方に許可を得て共同して切り出し、運搬に臨んだ。（写真 7）

写真 7

５．向日市竹結びフェスタ

日程：10 月 20 日

向日市にある洛西竹林公園にて行われた竹結びフェスタにて、4mに切った竹を用いたミニブランコを 2 台とかぐや姫セットを設置する形で参加した。かぐや姫セットは新しく作り直したものを設置した。ぴあぴあコミュニティサポート合同会社と共同して取り組ませていただいた。竹は竹林公園から事前に切り出させていただいた。（写真 8）

写真 8

６．城陽緑化フェスティバル

日程：10 月 28 日

近畿大学学生団体近畿大学農学部Ｆｅｅ Ｌｉｎｋと協力して木津川運動公園に全高約８ｍの竹のブランコを出展した。10 月 27 日に木津川運動公園付近の竹を切り出して設営場所に運搬した。前年度同様、竹友会として出展したのではなく竹の切り出し方、さばき方や設営の仕方などを教える技術提供という形で連携した。今年度はブランコだけではなく竹を切った際に出た穂先の枝や先端の細くて切り落とした部分を活用して笹ハウスを設置した。傾斜で日当たりがよいため、避暑する場にもなった。秘密基地のような場所を好む傾向がある児童に人気であった。（写真 9）

写真 9

7.中山団地　竹灯籠

日程：11 月 3 日

京都橘大学まちづくり研究会と共同で醍醐中山団地の公園を灯籠で照らし地域の児童生徒がステージでパフォーマンスをする企画を行った。竹友会はステージの設営と公園の一角を竹灯籠にて照らした。事前に醍醐の中山児童館裏の竹を切り出させていただき、京都教育大学内にて灯籠の作成作業を行った。（写真 10）

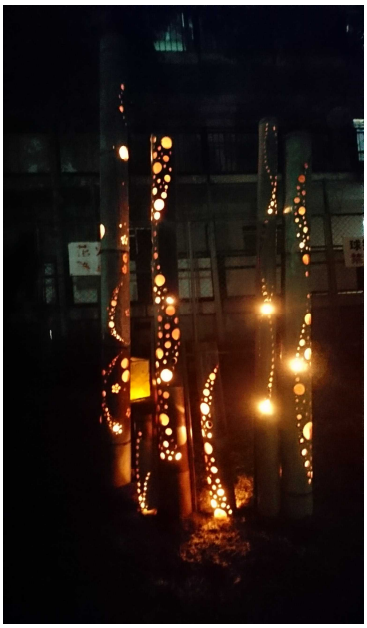

写真 10

8.木津川熱気球フェスタ　竹ブランコ

日程：11 月 11 日

公益財団法人青少年野外活動総合センターと共同で木津川運動公園にて 8mの竹を用いた巨大竹ブランコを設置した。11 月 10 日に事前に木津川運動公園付近の竹を切り出して設営場所に運搬した。前回の城陽緑化フェスティバルの際にも木津川運動公園では巨大ブランコを設営していたので、熱気球フェスタでは何人の方に乗ってもらえたかを集計した。結果、5 時間の間で 204 人の方に乗っていただけた。一度乗って二回目以降に来た方は集計に入れないこととしているので純粋な参加人数である。(写真 11)

写真 11

9. 藤陵祭竹ブランコ

期間：11 月 16 日～11 月 18 日

11 月 12 日に間伐も兼ねて竹を切り出し、11 月 16 日午前に設営作業を行った。藤陵祭初日は平日のため本学学生が多く訪れた。11 月 17 日、11 月 18 日は多くの来場者でにぎわい、竹のブランコを多くの人に体験していただいた。竹のブランコは初めて乗る子どもが多く、何度も繰り返し列に並び乗っている子どもも多かった。保護者も乗ったことがない方が多かったため、親子ともに楽しむ姿が見られた。３日で延べ４００人が竹ブランコを体験し朝から夕方まで多くの人が訪れた。前年度に訪れてくれた児童保護者の方からブランコに乗るために来たという声も聞かせていただいた。18 日には藤陵祭の各ブースにて行われていた SDGｓスタンプラリーのブースの一つとして参加させていただいた。竹を活用してなにかをする活動は SDGｓの視点から見ることができるということに気づくきっかけにもなった。

10. しめ縄作り

日程：12 月 12 日

京都教育大学附属京都小中学校 7～9 年生 D 組を対象にワークショップ形式でしめ縄作りを実施した。環境実践センターから稲わらをいただき、使用した。しめ縄のほかに、門松を一対つくり中学校校舎内に設置した。また附属京都小中学校で技術を教えている先生と協力して楽しく体験的な学習になるよう授業内容を打ち合わせるなど授業づくりを行い、1 時間目から 4 時間目にかけて授業を行った。

授業でははじめに竹友会の説明、門松の説明をスライドショーを用いて行った。そしてしめ縄がどう

いう意味を持つものであるかの説明を行い、正月の縁起飾りとして各自作ったものを持参して帰ってもらった。1,2 時間目にしめ縄づくりを行い、3,4 時間目に門松作りを行った。事前に準備していた植物以外にも学校内に生えている南天等も用いて楽しみながら活動に取り組んだ。

11. 留学生向けミニ門松づくり

日程：12 月 20 日

12 月 20 日に留学生の方を対象に、日本の正月飾りである門松を作り、ものづくりの楽しさを体験してもらうと同時に、日本の文化を知ってもらうことを目的として国際交流サークル FIRA と連携しミニ門松作り講座を行った。スライドショーを用いて日本の伝統文化である門松を説明した後、京都教育大学内にある植物を用いてミニ門松作りのワークショップを行った。（写真 12）

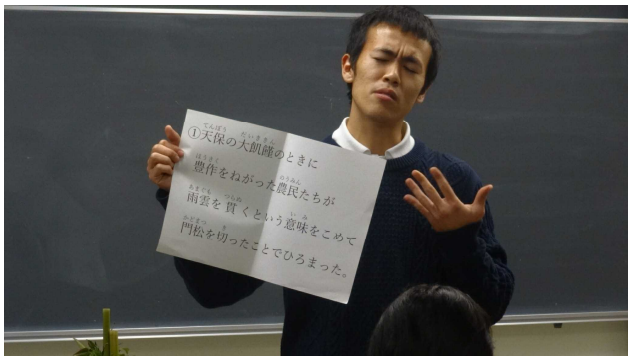

写真 12

12. 門松づくり

日程：12 月 26 日～27 日

日本の伝統的な正月飾りである門松についての知識を深め、実際に作ることにより竹友会メンバーの技術向上並びに門松を実際に飾ることにより、竹友会の活動をより多くの方に知ってもらうことを目的に高さ約１７０ｃｍの門松を製作した。門松は本学藤森学舎正門に設置した。12 月 27 日に京都教育大学正門に門松を設置した。（写真 13）

写真１３

13.竹文化振興協会　会誌への寄稿

日程：1 月 15 日

竹文化振興協会から、会誌「竹」に竹友会について書いた原稿を寄稿してほしいというお話をいただいた。これまでの活動を振り返り紹介する形で原稿をしたためた。発行は 3 月である。

第３章　結果や成果など

１．竹灯籠手作り市

藤森盆踊りフェスティバルにむけて、ただ竹灯籠を自分たちで作って設置するだけでは面白くないと考え行ってみた。自分で作った灯籠がライトアップされるなら見に行ってみようとなることで盆踊りフェスティバルに足を運ぶ人も増え、周辺地域の活性化を図る主体的かつ持続的な活動にもつながると考えた。結果としては実際にねらい通りに手作り灯籠を見るために足を運んできた児童保護者の姿が見られた。また、手作り市には来なかったがいけばよかった、来年は行きたいという声も盆踊りフェスティバル当日たくさんいただけた。また、純粋に普段触ることのない竹を用いたり工具を触ってものづくり体験ができることがよかったという声もいただけた。

チラシによる宣伝効果も功を成した。実際に手作り市に訪れた人の 75%はチラシの影響であったことがアンケートからわかるので宣伝を怠っていれば上記のような結果は得られなかっただろう。

２．七夕イベント

笹飾りだけでなく、近年流行りの SNS 映えを狙って作ったかぐや姫なりきりセットが人気となり、ライブ期間中は多くの学生が記念撮影をしている姿

が見られた。国際交流サークル FIRA との流しそうめん大会でも留学生の方に興味を持っていただき、七夕、ながしそうめん、かぐや姫が登場する竹取物語について多くの日本文化を伝えることができた。

３．藤森盆踊りフェスティバル出展

藤森盆踊りフェスティバルでは、前年度より設置した灯籠の数も増やし、およそ 3 か月の間準備に用いた。500 個ほどの輪切りの竹を用いてつくった河はこれまでにない出来栄えであった。今年はテーマを「七夕」に定め、天の川と織姫、彦星、12 星座などを表現した空間を作るように努めた。何も言わずとも織姫や彦星（写真 13）を見てテーマに気づいてもらうことができた。手作り市で地域の児童保護者が手作りした竹灯籠も手作り市に参加した人されなかった人共に良かったという声をいただき、来年もやるなら行きたいといっていただけた。当日に協力いただいたアンケートによると盆踊りフェスティバルに来た人の 84.9%もの人が竹灯籠の展示について知っていた。（写真 14）また、37.7%の人が竹灯籠のライトアップを見るためにきたと回答されていた。（写真 15）アンケートの回答数は 53 件であり、当日の参加者は 2000 人程度であった。宣伝活動として、学内では軽音部とフォークソングクラブのライブに訪れた人にチラシを配布してもらった。また、学内の掲示板を活用した。学外に向けては、手作り市同様藤森小学校にてチラシの配布をお願いした。また、JR 藤森駅の掲示板にもお願いをして掲示してもらった。SNS を用いて発信をすることで宣伝活動を行いもした。盆踊りフェスティバルに参加するのは今年度で 3 回目であり、地域の人からの認知が広がってきていることと、チラシによる宣伝効果、手作り市での活動などが足を運んでもらうきっかけになったと考える。また当日の出来栄えによって楽しみにしてもらえるかが変わってくると思うので 3 か月かけて準備した分よい竹灯籠が今年度もできたので成功であったと思う。18 時から 21 時と短い時間ではあったが訪れた多くの方に幻想的な風景を楽しんでいただいた。

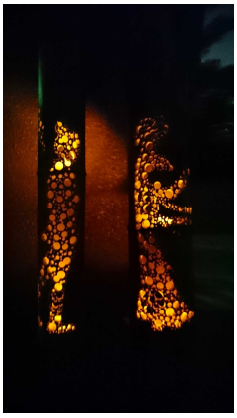

写真 13

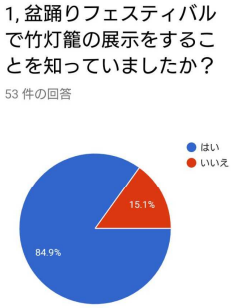

写真 14

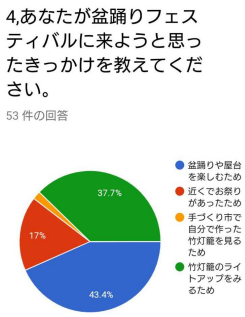

写真 15

4.近江舞子竹ブランコ

竹友会の活動が 3 年目を迎え、巨大ブランコの知名度が上がってきていることもあってさまざまなところから声をかけていただくようになった。たくさんの児童に喜んでもらい、なかなかできない経験ができる場としてこれからも竹ブランコを続けていけたらよいと思う。

５．向日市竹結びフェスタ

巨大ブランコは足の部分を地面に埋めてしまうことで固定し、安定して楽しんでもらえていたが今回の設置場所が埋めることができないコンクリートの地面であったので、安全性の確認のために試作を入念に行い試行錯誤を繰り返した結果、無事けが人や事故を出すことなくイベントを終えることができた。また、J-com の取材を受け竹友会として取材に答えた。

６．城陽緑化フェスティバル

城陽緑化フェスティバルでは近畿大学 FeeLink と協力して竹ブランコ設営を行った。木津川運動公園のイベントで、何度か竹ブランコを出展してきたのが好評であったため竹ブランコを目当てに訪れた方も多かった。近畿大学 FeeLink は食農教育やビオトープづくりなど環境問題に取り組む団体で竹林整備なども手掛けている。今年も、お互いの経験や知識を交換し合える良い機会となった。

7. 中山団地　竹灯籠

京都橘大学まちづくり研究会と協力して中山団地の公園に灯籠を設置した。まちづくり研究会は陶器の灯籠を設置して竹灯籠とはまた違った表現をしていて勉強になったと思われる。竹友会は地域の児童生徒がパフォーマンスをするステージを手掛けさせていただいた。竹が身近に群生している地域なので、竹が灯籠になってこのような姿になるのかと喜んでもらえた。ものづくりに興味を示す吹奏楽部の演奏としてステージでパフォーマンスをしていた中学生に、どうやって作るのか、竹友会はどういう活動なのかと熱心に質問をされたので個別で灯籠づくりを少しだけ体験してもらった。

8. 木津川熱気球フェスタ　竹ブランコ

昨年度からお世話になっている木津川運動公園での巨大ブランコを行った。熱気球フェスタでは何人の方に乗ってもらえたかを集計した。結果、5 時間の間で 204 人の方に乗っていただけた。一度乗って二回目以降に来た方は集計に入れないこととしているので純粋な参加人数である。運営時間中は列が途切れることはなく、公園の閉園時間が近づいたため乗れなかった児童の姿もみられたので今後もつづけていきたい活動であると考える。

9. 藤陵祭竹ブランコづくり

去年に引き続き藤陵祭で竹ブランコを出展した。本年度は 3 日間出展し、延べ約４００人が竹のブランコを体験した。初日、２日目は誘導の問題もありあまり客が来なかったが学園祭実行委員の協力もあり、２日目の後半から３日目は途切れることなく多くの方に乗っていただいた。三日目には SDG s スタンプラリーに参加し、ブランコに乗りに来た児童保護者に SDG s というものがあること、SDG s とはどういったものであるかについて知ってもらうきっかけにもつながった。

10. しめ縄づくり

附属京都小中学校にて、教育実習を経験している３回生以上のメンバーで 1～4 時間目の授業時間をいただいてしめ縄、門松づくりを行った。附属京都小中学校の技術の先生と綿密な打ち合わせができたことも授業づくりがうまくいった要因であると考える。前年度でも附属京都小中学校では同じような形でミニ門松づくりを行っており、その際に門松の由来などについての話をしてしまっていたので、同じ内容の話ばかりでなくしめ縄についての話や様々な門松があることなどの話をして、より多くの日本文化に関する学びにつながるように努めた。

11. 留学生向けミニ門松づくり

今年度も国際交流サークルと協力して日本の文化の一つである門松を、手作りしてもらう体験の場を設けた。ただ作るだけでなく門松とはどういう意味があって何のために飾るのかをパワーポイントを用いて話した。ところどころにクイズ形式で進めていく箇所を作り、留学生と国際交流サークルの人たちを混合にした３班に分かれてもらい班ごとに話し合って考えてもらう形式をとったため楽しんでもらうことができた。最後はそれぞれのつくった門松をもって集合写真を撮り、門松を持参してもらって解散した。

12.門松作り

門松づくりは竹友会メンバーの技術の向上、日本文化である門松を作ることで体験的に学び、０からものを作り上げる楽しみに気付くと共に、竹友会の活動をより多くの方に知ってもらうことを目的に行った。門松づくりで伝えられるものは大きく３つある。門松の持つ歴史的な背景や植物の縁起、由来など文化的側面、植物をどこに植えるのか、マツやウメの枝ぶりを見てどこ切りどのように植えるのかな

ど造園的な美術的側面、のこぎりやハサミをどう使えば作業しやすいかなど技術的側面である。正門に飾ったため大学を通りかかった多くの人が足を止めて門松を見てくれた。

13. .竹文化振興協会　会誌への寄稿

竹文化振興協会の会員はおよそ 3500 人である。毎年 3 回、全会員にむけて会誌「竹」が配布される。今年の 3 月に配布される第 139 号にて、竹友会の寄稿した原稿が載せられる。

第４章　まとめと反省、今後の展望など

１．竹灯籠手作り市

アンケートの実地によってチラシによる宣伝効果を調査するという一つの目的は達成することができたが、今後より良くしていくための意見を聞きたいという目的は達成できなかった。記述式で意見を求めてしまったため空欄のままのものばかりであった。記述項目に関しては保護者が書いてくれるものであると考えていたが、よく考えれば対象は児童であるから児童自身がこたえられるように工夫をしたものでないと児童自身の気持ちや意見はわからないと感じた。自由記述の項目だけにするのではなく、選択式の項目の中にも次回以降につながるような質問項目を設ければよりよかったと感じている。

２．七夕イベント

流しそうめんは国際交流サークル FIRA の夏の活動で人気となっており、留学生の方も帰国する前のイベントで印象に残っているという声も聞く。七夕の笹飾りを学内だけでなく、地域と連携して飾る場所を増やしていきたい。特に笹飾りなどは小学校や児童館への需要が見込めるだろう。

３．藤森盆踊りフェスティバル出展

藤森盆踊りフェスティバルでは、竹灯籠単体でのライトアップにより多くの方に喜んでいただいた。竹を切り出して加工して、１つ１つを丁寧に作った竹灯籠が多くの人に見てもらい、多くの人が足を止めて見てくれるのを間近で見ることができて大きなやりがいを感じた。藤森盆踊りフェスティバル実行委員会の方からの評価も大変高く、来年もしてほしいと多くの方に声をかけていただいた。しかし、規模が大きくなっていく半面どうしても人手不足が強く感じられた。少しずつやりたいことが増えていきどんどん規模が大きくなっていっていくので竹友会の活動を学内でももっと知ってもらい、興味を持ってもらえるようにしていきたい。今回の竹灯籠のイベントで力を入れすぎて、予算を少し超えた出費になってしまった。見通しが甘く自分だけでなく学生課の方や竹友会のメンバーに迷惑をかけることになってしまった。いつお金が必要になるのかわからないということを実感したので予算の計画は余裕をもって組んでおく必要があると学んだ。

４．近江舞子竹ブランコ

これまでのブランコではブランコの設置場所と竹の切り出す場所がそれほど離れていない場合ばかりであったので、8mほどの竹を軽トラックに載せて運ぶのは不安もあった。結果的には入念なロープワークと工夫で大事なく運搬を終えることができた。

５．向日市竹結びフェスタ

今年初めての試みとして自立式のブランコを作る機会となった。竹友会だけでなく各地から様々な団体が竹を用いて何かを出展する大きなイベントに声をかけてもらえたことは光栄なことであった。しかし、イベントの規模が大きい分多方面との連絡や報連相が求められる中で、うまく伝達ができていない部分や不明な部分が生じるなどで苦労することが多くあったように感じられる。連絡一つするにも、内容を伝わりやすくする大切さや連絡の時期など、ただ伝える伝えられるだけではいけないということを感じられる機会であった。

６．城陽緑化フェスティバル

城陽緑化フェスティバルでは竹を扱う竹友会と環境教育や食農教育など幅広く自然を相手に活動している近畿大学 FeeLink が互いの活動を教えあい自然環境保全の大切さや、竹を使った遊びの楽しさを伝える活動ができた。竹友会の竹灯籠のつくり方や竹ブランコのつくり方といったノウハウを教えるこ

とで新たなつながりができた。ただ、ブランコの活動が繰り返されていくうちにただの作業になってしまっているように感じられた。始めたばかりのころはどうしたら作れるのか安全性は確かかと試行錯誤しながら取り組んでいたが、安全がある程度確認出来て楽しめるものができてしまったため技術継承のみになってしまっている。ブランコは望まれたり楽しんだりしてもらえるので続けていけばよいと思うが他のものにも手を出していってもいいかもしれない。

７．中山団地　竹灯籠

竹灯籠の運搬が一番の課題であった。醍醐まで灯籠をどうやって運ぶか、もしくは醍醐で灯籠を作ってしまうのであれば運ぶ必要はなくなるが時間をどうやって作るべきかと悩まされた。京都橘大学まちづくり研究会の方に相談して軽トラックを出してもらうことで解決することができた。予算が限られている中での活動は規模が大きくなるほど難しくなっていくことを感じた。しかしこのときは自分たちで何とかしようとしていたことも負担を増やす一因であったと思われる。相談して、頼るあてがあるのであれば相談をするべきであるということが実感できた機会であった。

８．木津川熱気球フェスタ　竹ブランコ

人数不足が強く感じられた。巨大ブランコを作るのはどうしても物理的に人手がないと厳しい。しかしこのイベントが行われた時期にはメンバーのほとんど都合が合わず、体調不良も相次ぎ竹友会からは 2 人で臨むことになった。その日熱気球フェスタに参加していた別の団体の方や公園のボランティアスタッフの方の助けを借りてどうにかしてブランコの立ち上げは成功できた。体調不良などは仕方がないといえば仕方がないものであるが、冷え始めた時期で風邪もはやり始めていたころであるので体調管理の呼びかけも必要であったのかもしれない。

９．藤陵祭竹ブランコづくり

3 日間竹ブランコを出展し多くの方に日常では体験できない竹ブランコの体験をしていただいた。竹ブランコ自体は他にはない面白さがあり魅力的ではあるが誘導の仕方や宣伝不足もあり最初から終わりまで多くの人が途切れることなく竹のブランコに乗るといったことはなかった。竹のブランコを作り上げることも重要だが広報活動を充実させなければ乗る人がいないという現実を踏まえて、魅力をいかに多くの人に伝えるかが課題となった。

10. しめ縄づくり

中学生の都合に合わせて平日の水曜日に行ったこともあって 2 回生 1 回生の参加は難しかった。全体的に滞りなく進行はしたが、しめ縄は作っていてあまり楽しくないようで前年度のミニ門松のほうがよかったという声があった。同じことをしても退屈かと考えたが裏目に出てしまったと感じている。

11. 留学生向けミニ門松づくり

前年度同様、日本文化に触れながらの手作り体験は留学生にとっては新鮮な経験であったと感じている。しかし、今年は班に分けて作業を進める中で作業進度に大きな差ができてしまい退屈な時間ができてしまう班も見られた。全体を見ながら待つばかりでなく臨機応変に進行していくことができればよかったと感じている。結果的には予定通りの時間内に終了することができたが、作業が早い班にはおまけの作業を用意しておいてもよかった。

12. 門松作り

大学正門の門松づくりに関してはこれまで活動して磨いてきた技術を披露する、腕試しのような活動となった。1 年間竹を切り、加工して竹を通して学んできたものを存分に発揮した。門松は正月飾りの 1 つに過ぎないが、のこぎりで竹を切る、植物を剪定する、飾り付けるというものづくりに大切な要素が詰まっている。門松づくりを通して人とのつながり、ものづくりの大切さ、日本文化の奥深さを体験的に学ぶことができた。しかし、門松を作ることばかりで置く時のことを考えていなかったことが今回の大きな反省であった。大学に置くつもりで作っていたが、大学からの許可を得ることをする前に作成に取り掛かっていたので後から多くの方にご迷惑を

かける結果となってしまった。組織としてプロジェクト活動を行っていること、１人で好き勝手にやっているわけでないということを自覚し、責任を考えた行動をとっていくようにしなければいけない。

13. .竹文化振興協会　会誌への寄稿

一年間の活動の総締めとしてこれまでの活動をまとめ振り返り、紹介する形で原稿を執筆した。数千人の人の目につくものに原稿を寄稿する体験は貴重なものであったと感じる。

・今後の展望

竹を用いた活動も３年目ということもあり、地域住民の方にも竹友会の名前が広く知れ渡り、昨年度以上に多くの方からイベントの参加を持ちかけられるようになった。やってみようと多くのイベントに参加したため人とのつながりや、企画の数は増えたが、作業量と人手が釣り合わず充実はしていたがこれ以上の規模の拡大は現時点では厳しいものがある。また、中心メンバーであり創設された世代が卒業されるため、人手不足はより深刻なものになることが予想される。昨年度の展望として後輩の確保を挙げていたので学内での活動の宣伝も意識的に行ったが竹友会に参加しようという魅力を感じさせるに至れなかった。しかし、外部団体との協力によってこれらの課題を解決できるのではないかと考えるきっかけになった活動がいくつかあった。なので、今後は竹友会の人員を増やすことばかりでなく他団体との協力をより意識して活動を続けていきたい。それによって人と人のつながりも広がり、より多くの人々に喜んでもらえるような活動作りの実現を目指したい。

＜参考・引用文献＞

参考・引用文献など